

南極OB会 会報

No. 20

発行 南極OB会
会長 国分 征
編集 広報委員会

目 次

口絵 第54次ミッドウィンターグリーティングカード	1
2013年度南極OB会総会開催	2
1次越冬隊3人の夢の共演	4
話題：幻の昭和基地、「マルサップ!？」 とは 柴田鉄治	5
南極関連情報	7
第55次隊南極地域観測隊員等決まる	7
第54次越冬隊の状況	7
第13回「南極の歴史」講話会	7
隊長“小口 高”を語る 福井徹郎	7
オーロラに魅せられた男 小口 高	9
国分 征	9
連載支部便り⑩（茨城支部） 講演会と雪上車修復作業の報告	10

連載「時は巡り」⑪	
12次隊フラガール 中尾正義	12
会員からの便り	13
連載「帰国後の各隊の動き」	
第19次越冬隊の同窓会	14
38次観測隊帰国15周年記念の会	14
会員の広場	
訃報	15
第14回『南極の歴史』講話会の開催について	15
2014年南極OB会名入りカレンダーの販売 と注文受付	16
南極OB会アーカイブ事業報告	16
広報委員会からのお知らせ	16



2013 Mid Winter Greetings from SYOWA STATION
The 54th Japanese Antarctic Research Expedition

第54次越冬隊からのミッドウィンターグリーティングカード

2013 年度南極 OB 会総会開催

ミッドウィンター祭、第 13 回「南極の歴史」講話会同時開催

2013 年度南極 OB 会総会が 6 月 22 日（土）、午後 3 時半～4 時まで、一橋大学一橋講堂 2 階中会議室において開催された。また、同会場で、総会に先立ち、第 13 回「南極の歴史」講話会が開催された。総会終了後、ミッドウィンター祭が一橋講堂に隣接する学術総合センター 3 階の食堂で、盛大に行われ、昭和基地からのメッセージが披露された。

南極 OB 会総会開会

総会の冒頭で、神田運営委員長より過去 1 年間の物故者の名前が読み上げられ、1 分間の黙祷を捧げた。引き続いて、国分 征会長は挨拶の中で、南極 OB 会の活動は本年度 4 月に、文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）を受けるなど、今日では南極の普及啓発を行う日本の中心組織に発展してきたことと、その評価に応えるためにも運営組織の見直し、地方支部活動の推進、財政面のサポート等について検討していることを述べられた。続いて、南極 OB 会会則第 11 条に基づき、福谷 博氏が総会議長に指名され、以下の活動報告、審議事項の議事進行に入った。



挨拶する国分征南極 OB 会長

1. 活動報告

(1) 一般報告

・運営委員会（神田啓史運営委員長）

2012 年度南極 OB 会総会を 2012 年 6 月 23 日に開催した。南極 OB 会運営委員会は月 1 回（第 3 土曜日）で 12 回（第 61～72 回）を開催した。運営委員会は広報委員会、アーカイブ委員会、南極教室委員会、記念事業委員会との合同で開催し、運営委員会の議事録を各支部長にメールで送付した。「南極の歴史」講話会は第 11～13 回を開

催した。その他、6 月 23 日にミッドウィンター祭、11 月 2 日に第 54 次南極観測隊壮行会を開催した



総会会場の様子

(2) 各委員会報告

・広報委員長（柴田鉄治委員長）

会報第 17～19 号を発行した他、ホームページの充実を図った。

・南極教室委員会（里見穂委員長）

2012 年度は南極 OB 会のホームページからの申し込みにより、4 回の南極教室を実施した。公民館等の高齢者を対象にした企画であった。

・アーカイブ委員会（小野延雄委員長）

アーカイブ資料の受け入れ、また、保存を担う国立極地研究所アーカイブ室との連携について報告があった。これまでに南極 OB 会が受け入れたアーカイブの一部が紹介された。

・南極 OB 会白瀬南極探検 100 周年記念事業委員会（渡辺興亜幹事、代理神田運営委員長）

2012 年 5 月 26 日に事業委員会総会を開催し事業を終えているが、その後の継続活動について報告された。白瀬日本南極探検隊 100 周年記念プロジェクト実行委員会によって記念誌「白瀬 轟 大和雪原に立つ」

が編集、出版された。本書の第2章にまとめられた南極OB会「南極記」研究報告「南極白瀬日本南極探検隊の検証」が紹介された。また、南極OB会が中心になって編集された南極探検船『開南丸』『野村直吉船長航海記』（成山堂書店）が出版され、その書籍が2012年度海事特別賞（社団法人日本海事集会所）を受賞したことが紹介された。

2. 審議事項

・2012年度収支決算報告（田中洋一会計担当）について報告（資料1）があった。6月8日付けで、小嶋尚会計監査により会計監査の点検が実施され、正確に管理されていることが報告された（資料2）。本議事は賛成多数で承認された。

南極OB会 2012年度収支決算書					
平成25年3月31日 (単位:千円)					
収 入			支 出		
千 円	決 算		千 円	決 算	
2012年3月末繰越	4,765				
2012年度通信費 (900人見込)	2,700 2,533 (843人)	会報発行関係費用	1,200	1,143	
		事務室運営費	1,500	1,708	
		交通費 (委員会等)	120	131	
総会・壮行会	700	総会・壮行会	700	696	
グッズ料金	150	グッズ経費	20	-	
カレンダー	550	カレンダー経費	500	1,120	
		慶弔関係費用	30	20	
その他	-	予備費	30	-	
小 計	4,100	小 計	4,100	4,818	
		次年度繰越		4,447	
2012年度収支				318	

資料 1

会 計 監 査 報 告

南極OB会会則第8条により、2012年度会計(2012年4月1日～2013年3月31日)について、2013年6月8日に監査を実施した。

金銭出納簿及び関係書類、預金口座通帳、振替口座管理状況等について点検した結果、すべて正確に管理されていることを確認したので報告します。

2013年6月8日

南極OB会

監 事 小嶋 尚

小嶋 尚

資料 2

・2013年度の活動計画（運営委員長）について報告があった。平成13年度は年3回のOB会会報の発行、総会・ミッドウィンター祭、観測隊壮行会、年3回の「南極の歴史」講話会の開催、各委員会の活動推進の他に、支部組織の活動（講演会等）の協力、会員間連絡の強化（HPの充実等）、その他（書籍編集・出版、記念品・書籍販売等）の活動計画が提案された。本議事は賛成多数で承認された。

・2013年度収支計画（会計担当）について提案があった。本議事は賛成多数で承認された（資料3）。

南極OB会 2013年度 収支計画			
平成25年6月22日 (単位:千円)			
収 入		支 出	
2012年度通信費 (850人見込)	2,550	会報発行関係費用	1,200
		事務室運営費 (家賃、郵送料、事務費等)	1,500
		交通費 (委員会等)	135
総会・壮行会	700	総会・壮行会	700
グッズ料金	250	グッズ経費	25
カレンダー	1,200	カレンダー経費	1,080
		慶弔関係費用	30
		予備費	30
計	4,700	計	4,700

資料 3

・その他
運営委員長より2013年度の南極OB会運営体制はほぼ昨年度と同様な組織で進めることが提案された。しかしながら、2013年度から国分会長の指示により運営委員会は運営組織・体制、タスクの見直し、支部組織の現状把握、各種委員会のあり方、通信費等財政面の見直しなどを検討していることが報告された。

南極OB会総会閉会

福谷議長は総会のすべての報告事項、審議事項が終了した事を告げ、閉会した。総会閉会后、ミッドウィンター祭が学術総合センターの食堂で（3階）、16時半より開催された。



1 次越冬隊 3 人の夢の共演

～「第一次南極観測越冬隊と犬たち」の講演会で実現

朝日新聞記者・中山由美（45 次越冬隊・51 次夏隊）

その夜は“夢の共演”だった。第 1 次南極観測越冬隊の北村泰一さん（82）、村越望さん（87）、作間敏夫さん（86）の 3 人がそろってステージに並んだのだ。8 月 25 日、トークショー「第一次南極観測越冬隊と犬たち」が東京の武蔵野公会堂で開かれた。



講演会の様子

企画し、自ら出演・進行役でもあった私自身もわくわくしっぱなしだった。大先輩は耳が遠くて質問と答えがちぐはぐになる場面もあった。だがそれらもご愛敬、何より圧倒的な存在感で、発する言葉の一つ一つに南極観測草創期を切り開いた証言の重みを痛感させられた。

きっかけは 3 カ月半前にさかのぼる。5 月初め、東京タワーの足元にある南極観測隊の樺太犬像を撤去することになったという話を聞いた。「東京タワーも老朽化したので再開発する。足元の建物や植栽も新しくするので樺太犬像を撤去してほしい」と、東京タワーの運営会社・日本電波塔が日本動物愛護協会へ連絡してきた。

越冬を断念した 2 次隊は 1958 年 2 月、15 頭の犬を昭和基地へ残してきた。タワーができたのも同じ年。日本動物愛護協会は募金を呼びかけて犬の像を造ることにした。製作は渋谷駅前のハチ公像を造った安藤士（たけし）で、像は 1959 年 9 月、タワーの足元に置かれた。

以来、半世紀余り親しまれていたが、撤去の要請に協会も困っていた。移転先は国立極地研究所がいいだろうと相談は始めていたが、「東京五輪招致キャンペーンで像がある場所に宣伝物を建てたい」とせかされたのだ。撤去と移転には「850 万～600 万円かかるかも」という。1 頭ずつ傷つけないように土台からはずすのに手間がかかる。協会ですぐ出せる額ではない。そんな記事を 5 月 11 日の夕刊に掲載した。

折しも私はその日、北村さんとの約束があった。南極講演で福岡出張が決まり連絡していたのだ。像の話聞いた北村さんは早くも資料を作って来られた。「保存運動をしなくては。朝日新聞で講演会を開いて下さい。私がお話します」と。「南極観測をやる」と言い出した朝日新聞こそ歴史と意義を語り継ぐ使命があると——熱弁された。

社内の人たちに聞いてほしいとつくづく思ったが、残念ながら時代は変わり、社内ですんなり歴史を知る人も意識のある人もごくわずかだ。だが販売局担当者が動いてくれて武蔵野・三鷹ブロックの販売店が主催してくれることになった。極地研と南極 OB 会の後援も決まり、舞台は整った。

心配はあった。ホールの 350 席が埋まるかどうか。だが、申し込みが殺到して瞬く間に満席。その後も問い合わせが続いて千人近く！北村さんとタロ・ジロの求心力に驚かされた。もうひとつの心配は特別ゲストだ。福岡在住の北村さんが東京に来られる機会に、村越さん、作間さんとの再会を果たしていただきたい。お 2 人にもご登壇いただきたい。私の願いだったが、体調の心配もある。これも杞憂に終わった。やはり屈強の 1 次越冬隊だ。当日、村越さんも作間さんも早い時間につけ、北村さんとの再会を喜ばれた。

午後 7 時開演。まずは南極の自然や今の観測の紹介を私が務めて北村さんへバトンタッチ。ご挨拶をされている背後に、私はそっと椅子を寄せたが、北村さんは座る気

配がない。丁寧にまとめたパワーポイントの画面を切り替えながら、南極観測がどのように始まったかを語る。朝日新聞の矢田喜美雄記者の発案、松村謙三・文部大臣の理解、南極観測史の表舞台では目立たないが「この人たちがいなければ」と強調した。興味深い話は続くが、時間が足りない。「あともう 15 分ですか」と北村さんも残り時間を気にしながら最後は駆け足に。とうとう 1 時間立ちっぱなしだったが、2 時間でも 3 時間でも話し足りなさそうだった。

対談の始めには動画を上映した。白黒の映像の中、宗谷の甲板の上で踏ん張る犬たち、そりをひいて雪上を走る姿に皆、引き込まれた。昭和基地で正月に 11 人の越冬隊が全員で撮った写真も紹介し、そこでサプライズ！「村越さんと作間さんが見えなくなっています」と舞台上に招き入れると会場にどよめきと大きな拍手がわいた。

「南極に着いた当初、犬たちはうまく走れずに評判がた落ち」「極夜にオーロラが出ると犬が鳴いた」「犬は道があると走れるが道がないと走れない。年間 1600 キロ走ったうち 1000 キロは人間が先導した」「お腹が空いた時にゴロのビスケットを失敬」…ユニークな北村さんの裏話、村越さんや作間さんの苦労話、まだまだ聞き足りない、名残惜しさばかりが募るなか幕は下りた。

「皆で会えるのは最後かもしれない」と 3 人はそろって冗談交じりにおっしゃられていた。そうはさせない！こんな素晴らしい機会を一夜限りで終わりにしたくない。多くの方々が聞きたいに違いない。北村さんも、犬係としてお世話になった北海道の方々へお礼に行きたいとの思いは強い。各地で開催できたらと私も願っている。

寄付や東京タワーなどの協力もあり、樺太犬像は極地研へ移転できることとなり、この秋、お披露目となる。

「私の前に道はない。私の後ろに道はできる、その言葉にあこがれていた」と北村さんはいう。誰も経験のない南極・昭和基地で最初の冬を過ごし、今につながる南極観測の第一歩を記した、その生の証言を一人でも多くの方に聞かせてほしい。そして私たち後輩はそれを語り継ぐ使命を託されているのだ。

編集者注：この講演会は、
主催 朝日新聞東京総局、朝日新聞販売店
武蔵野・三鷹ブロック
後援 国立極地研究所、南極 O B 会
で実施されました。その概要と感想を中心として活動された中山氏より寄稿頂きました。



話題：幻の昭和基地、「マルサップ！？」とは

今年の南極 O B 会のミッドウィンター祭で竹中工務店 O B の近藤基樹氏があいさつに立ち、南極観測発足当時の基地建物の開発秘話の一端を披露した。南極 O B 会報にもう少し詳しく書いていただけないかと依頼したところ、広報委員会のほうでまとめてほしいと、当時の建築雑誌に載った「南極建築特集」のコピーを大量に送っていただいた。読んでみると、なかなか面白いので、ここにその一端を紹介する。

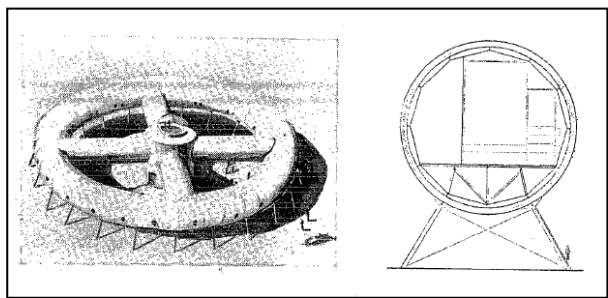
1956 年 12 月、日本学術会議の茅誠司会長から日本建築学会に対し、南極観測隊が使用する建物についての協力、援助を得たいとの依頼があり、学会内に二見秀雄・東工大教授を委員長とする南極建築委員会を立ち上げた。「宗谷」が南極に向けて出港す

る 10 か月前のことで、南極への準備がいかにあわただしく行われたかを示す一例だろう。

もっとも、その前から朝日新聞社の南極学術探検事務局では、早大建築学科を中心とするグループ（朝日グループ）が基地建物の設計を研究しており、その中心人物 6 人がそのまま新委員会の委員に名を連ねているので、それに東大、京大、建設省建築研究所などの重鎮を加えて権威付けを図ったものだといえないこともない。

グループのリーダー格を務め、新委員会の幹事となった武基雄・早大助教授の「南極建築こぼれ話」によると、建築委員会の設計部会には「赤鬼」と「青鬼」の二人の鬼がいて仕事を引っ張り、それを「三蔵法

師」のような二見委員長が緩急自在に手綱を締めてまとめあげたというのである。



幻の昭和基地、「マルサップ」

西遊記の三蔵法師なら孫悟空と猪八戒のはずだが、ここでは赤鬼の矢田喜美雄・朝日新聞記者と、青鬼の浅田孝・早大講師が大活躍したというのだ。矢田喜美雄氏は「日本も南極観測に参加しよう」と言い出した南極観測隊の産みの親であり、朝日新聞の事務局を動かしている中心人物の一人ではあったが、早大高等師範部出身で小学校の教師を経て新聞記者になった変り種で、建築学の素養はまったくなかったはずである。

それでも、当時の日本に南極を知っている人は皆無に近かったので、矢田氏は南極について日本で最も詳しい人物として、建築委員会でも中核となって活躍し、建築雑誌にも「南極というところ」という大論文を書いているのだ。

「矢田委員が大きな目玉をむいた赤鬼だとすれば、浅田委員はさしずめ口が耳まで避けた青鬼というところだろう。ひとたび仕事を喰いだすと、それこそ骨のズイまでしゃぶらずにはおかない。しかもこの青鬼氏、人里好きで夜な夜な集会にあらわれ、口を開けばバリゾウゴン、新聞社も学術会議も学会も竹中も、いや南極建築そのものも、たちまちアビキョウカンと化してしまう」と武氏は記しているのである。

朝日新聞社は 56 年の 1 月から 2 月にかけて、北海道の濤沸湖で耐寒設営訓練をおこなった。氷上で建物を建てたり、雪上車を動かしたり、往復 100 キロの雪中強行軍があったりした。この濤沸湖訓練に参加した建築設計部会の中核メンバーは、帰途の列車内で次の基本設計の「謀議」にふけり、相談が一決して快哉をさげんだときに、たまたま列車がマルサップという駅に停まったというのだ。

そのときの着想を発展させたものが、別

図のようなドーナツ型の建物案で、以後これを設計部会では「マルサップ・プラン」と呼んできた。マルサップ・プランは、ドーナツ型をオリジナルにその後次々と案が出てきたが、どれも丸い形だという。

このプランの特徴は、円筒ダクトなどに使われている螺旋管の製作方式を応用したもので、南極に直接製作の機械と材料を持ち込み、人手の代わりに機械を動かして短時間に建設しようという仕組みにある。

いわば機械がカイコで家がマユ、機械の中からひとりでに外殻をつくる金属板が出てきて螺旋状に回転体をつくってゆくと思えばよいのだ。治具は簡単、操作も容易で、材料はアルミ板だから輸送も楽にすむ。しかも治具を変えると自由に加工することができ、大小さまざまな形態を工夫し得る点に大きな魅力があった。

この案がまとまったとき、設計部会ではそれこそ「鬼の首をとった」ように喜んだそうである。

ところが、このマルサップ・プランは結局、採用されなかった。全委員会にかけて検討した結果、やはり安全第一という見地から、真四角なパネル式の型が採用されることになったからだ。

「結局、時間切れで、あと半年あったら、と設計部会としては残念でならなかった」と武氏は書いているが、竹山謙三郎・建設省建築研究所長によると、この建物に実際に住むことになるかもしれない西堀栄三郎・副隊長（のちの第 1 次越冬隊長）の意見が、建築委員会での議論に大きく影響したということのようだ。

西堀氏は建築委員会でごう語ったという。「われわれ素人にはどうも丸い家はむかぬようです。長く住んだら気が変になるだろう言うて、隊員からの評判があまりよくないのです。建築家の方がどうしても丸い家がよいといわれるのなら止むう得ませんが、せめて一棟だけでも四角い家を造ってください。頼みます」

このときは、誰かが「四角いほうを病院にして、気が変になったらそこへ入れて治すさ」と言ったので、大笑いになったそうだが、その後、委員会が何度も繰り返される中で、「やはり四角い建物にしよう」となったそうだ。

丸い建物、マルサップ・プランは、幻の

昭和基地となったのだ。いまの昭和基地の真ん中に、ドーナツ型の丸い建物が座って

いる姿を想像してみるのも一興だろう。
(柴田鉄治)



南極関連情報

第 55 次隊南極地域観測隊員等決まる

平成 25 年 6 月 21 日（金）に開催された第 142 回南極地域観測統合推進本部総会において第 55 次南極地域観測隊等 40 名が決定した。既に決定済みの宮岡隊長、牛尾副隊長に加え、総勢 63 名（夏隊 39 名、越冬隊 24

名）で編成される。夏隊同行者は最大 19 名の予定。前年の隊次は 2 年続いて接岸できず、輸送が十分でなかったため例年 30 名程度のところ、第 55 次越冬隊員は 24 名と少なくなっている。

第 54 次越冬隊の状況

昭和基地では太陽が戻ってきて約半月後の 7 月後半から屋外活動が再開され、8 月 7 日～9 日にかけて「S16 オペレーション」が行われているとのこと。

54 次越冬隊の越冬状況は、国立極地研究所のホームページに「昭和基地NOW!!」と

して掲載されているので見るができる。「昭和基地NOW!!」のURLは、以下の通り。

<http://www.nipr.ac.jp/jare/>



第 13 回「南極の歴史」講話会

(2013 年 6 月 22 日（土）14:00～15:30 一橋大学一橋講堂 2 階中会議室)

2013 年 6 月 22 日 14 時より、一橋大学一橋講堂 2 階中会議室で、第 13 回「南極の歴史」講話会が開催された。

当日の話題は、第 1 次から 3 次隊に参加され、第 12 次隊では観測隊長兼越冬隊長を務められた、故 小口高 氏の業績等を紹介する講演でした。12 次越冬隊に参加した福井徹郎氏から「隊長“小口 高”を語る」、また、国分征会長からは「オーロラに魅せられた男 小口 高」のテーマで話題提供いただいた。

「隊長“小口 高”を語る」

福井徹郎（12 次越冬）

第 12 次隊はこれまで五十数回に及ぶ南極観測隊の中で、おそらく最も特殊な隊と言えるであろう。観測船「ふじ」が、就航

して初めて昭和基地到着前に、40 日間（1971 年 1 月 1 日から 2 月 10 日まで）帰路でも 14 日間、海氷に閉じ込められて身動

きできない状態に陥った。そのため日本を出てから帰国するまでの日数は歴代観測隊で最も長かった。一方、昭和基地に滞在した日数は、最も短くて1年にも満たなかった。(2012年刊:極地研ライブラリー「氷海に閉ざされた1296時間」(成山堂書店)の小口氏による序文より)



講演する福井徹郎氏

1958年の第3回国際地球観測年(IGY)に南極観測を実施することが大きなテーマとなったのを受けて、日本学術会議が南極観測を実施し、朝日新聞が後援することとなった。ここに至るまでに南極観測の実現に向けて永田武東大教授が、国際的、国内的に強力な推進役であったことはよく知られている。1955年の秋、当時大学院生であった小口氏は、永田教授に呼び出されて、「僕は南極の隊長をやられることになりそうなのだが、もし南極に行くことになったら君は一緒に来てくれるかね」と真剣な表情で言われて、その場で「是非連れて行ってください」と答えたのが南極との関わり始めであったという。当時も自薦他薦で南極行を希望する人は多かった中で、永田教授は、小口氏の資質を買っていたのであろう。この時御両親には、南極には行ってもよいが越冬はダメと言われていたが、「行ってしまえばこっちのもの」と思っていたそうである。

第1次隊では、天候不順に悩まされ、いたるところにあるクラックやパドルを避けながら約50kmを雪上車で物資の輸送をし、基地を開設して、越冬隊の成立にこぎつけた。その帰途氷上が悪化して、「宗谷」はビセットされオビ号の救援を受けた。

本観測を目指した第2次隊は、天候に恵まれず、氷の状態も悪かったため、ぎりぎ

りのところで第1次越冬隊を収容するのが精一杯で、カラフト犬たちを連れ帰ることは出来なかった。第3次隊では航空輸送能力が向上したこともあって、無事に越冬隊が成立し、小口氏は地球物理担当隊員として越冬することになった。

6次隊以来中断していた南極観測は、新造船「ふじ」の就航を待って第7次隊から再開された。以来スクリューを折るなどの事故はあったが、昭和基地に接岸することが当然のことのようになっていた。この間、小口隊長は超高層観測分野をリードしてこられ、12次隊隊長としてオーロラ観測ロケット打ち上げの指揮を執ることとなった。「ふじ」が接岸することを前提として、ロケットを大型コンテナで輸送する計画が示された時、過去の経験に基づき小口隊長は、ヘリによる機内輸送が可能なように分解して梱包することを主張された。これによって、「ふじ」がビセットされたにもかかわらず、ロケットを基地に搬入することが出来たのである。ロケットはオーロラの活動を監視しながら最適のタイミングで打ち上げなければならない。このためには、冬季の低温の中でロケットに搭載するセンサーを常温で待機させなければならないので、ロケットと発射台を鉄骨のドーム(およそ直径20m、高さ15m)で覆い、内部を保温する計画であった。このドームも搬入できなかったために、ロケット観測は断念か、という事態になった。国内であれば当然打ち上げ延期である。しかし、隊長を中心に検討した結果、基地に残置されていた鉄材を使って発射台にロケットを囲む枠を組みつけ、周囲を園芸用のビニールで覆い、天井には紙を貼って、温風を送り込んでロケットを保温して、打ち上げまで待機することにした。紙とビニールを吹き飛ばして飛翔したロケットはオーロラの活動を見事に記録した。打ち上げ後は、ビニールと紙をはりかえれば次号機の打ち上げ準備完了である。国内の常識では考えられないこの方法で、12次隊は7機の打ち上げに成功した。12次隊以降もこの方式は踏襲され、ロケット観測に大いに貢献した。

小口氏が第1次隊から3次隊までの観測隊に参加する中で、自然条件の厳しさや、現地と国内における観測隊運営の困難さを経験したことが、12次隊において予期せぬ

出来事に次々と遭遇しながらも、オーロラの中に7機のロケットを打ち込んで観測を行ったこと、冬季の暗夜と低温に苦しめられながらも南極大陸内部に新たに基地を建設し、深さ75mまでのボーリングを行ったことなどに生かされている。次隊以降のロケット観測の継続、後年の大陸奥地での3kmに及ぶ深層ボーリングの基礎を築くことが出来たのは、小口氏が経験に基づいて立てた計画を実行に移していったリーダーシップによるところが大きい。

困難な条件の中でようやく越冬が成立した時の国内への報告や、羽田空港での帰国報告会見で、昭和基地におけるごみ処理対策の重要性を指摘したことが報道された。今ではごみの持ち帰りは当然のこととなっているが、小口氏の先見性を示す一つの例であろう。

小口氏は、南極観測を発展・深化させる上で大いに貢献されたが、残念ながら2010年12月に逝去された。心より御冥福をお祈りします。

「オーロラに魅せられた男 小口 高」

国分 征（7次、13次越冬、18次、32次夏）

国際地球観測年（IGY）に始まる南極観測の第1次隊から参加し、3次越冬観測により我が国の極地における地磁気、オーロラの観測・研究に先駆的な役割を果たした小口さんは、北極域における観測においても先駆的な役割を果たした。3次越冬隊の記録「14人と5匹の越冬隊：1年遅れの本観測」には、越冬中の1959年7月に起こった大磁気嵐に伴い3日3晩にわたって全天を染めた深紅のオーロラを経験したことが、オーロラを研究の中心に据えようと思いついた理由の一つということが記されている。3次隊の昭和基地観測により、オーロラ、地磁気・電離圏変動の相互関係を明らかにしたが、その後12次越冬時に新しいオーロラTV観測を始め、オーロラに魅せられた男ともいうべき研究を展開した。

12次隊（1970-72）では、観測隊長として初めての越冬ロケット観測を遂行する立場にあったが、自らの観測テーマにこだわり、超高感度TVカメラによるオーロラ観測を行った。当時まだ開発段階にあった暗視TVカメラを東芝から借り受け、オーロラ動態の観測に取り組んだのである。この時の観測により、その後のオーロラ研究・観測につながる重要な知見を得た。TVにより得られた実時間画像データの詳細な解析により、シート状オーロラの変形・回転が現象のスケールによらずフラクタル的な様相を示すこと、オーロラの出現モード、変形のパターンや出現の地方時依存、プロトン

オーロラの発達過程などオーロラのダイナミックな形態について、新たな理解を与えたのである。



講演する国分征氏

7次の昭和基地再開から1974年の極地研究所設立までは、超高層関連の観測は、小口さんの主導のもとに実施されたといつてよい。しかしながら国際磁気圏観測計画を契機に、1970年代後半以降は、時間的空間的な制約の多い南極観測から離れ、北極域におけるオーロラの広域観測に主力を注いだ。

1980年1月～2月には、カナダの研究グループによるロケット脈動オーロラキャンペーンに参加、オーロラTV、磁場変動、自然電波観測を行った。また、スバルバル科学調査（1983-1988）では、教育社極地研究グループ（立見辰雄、小口高、松田達郎、樋口敬二）の一人として、スバルバル、ニューオルソンにおける観測を始めた。

1985年12月～1986年2月には、東京大学、九州大学、ブリティッシュ・コロンビア大学他、国内外の9研究機関のサポートによる（スバルバールにおける観測のサポートは教育社）広域オーロラ動態キャンペーンを主導した。このキャンペーンでは、オーロラTV9点、VLF波動受信器や磁力計をカナダを中心にニューオルソンを含め、ほぼ40点に配置した。少しでも多くの観測機器をと、自ら高感度TVカメラを組み立てた。また、磁力計などのセンサー類は、すべて研究室で製作し、当時はまだネットワークもないアナログ時代だったが、高時間分解能の観測データ取得を目指した革新的な多点観測キャンペーンを実現した。

1989年には、名古屋大学空電研究所に所長として転任し、その後、太陽地球環境（STE）研究所の創設に尽力し、初代所長として現在のSTE研の礎を築いた。所長として多忙な中、オーロラ研究成果をまとめるべく常に原稿を手元に置き、執筆を続けておられたようだったが、車中荒らしに遭い記録メディアが紛失しまい、名古屋大学在任中には出版に至らなかった。退職後も執筆を続けられ、原稿はSTE研に託された。これを編集した「オーロラの物理学入門」がSTE研20周年記念事業の一環として公表されている。

小口さんは南極観測から始まり北極域での広域観測を展開し、オーロラに魅せられ

た研究者として、3次越冬の経験からオーロラを研究の中心に据えようとした思いを貫き実現したと思う。1965年南極観測が再開され、7次隊の手に依って昭和基地が再び息を吹き返した。新造の「ふじ」は、4,900トンの「宗谷」の2倍に近い8,600トンと大きく、砕氷能力も優れていた。何よりも輸送用のヘリコプターを2機搭載していたことも、輸送力を飛躍的に増す上で有効であった。これら能力向上の結果が、観測事業の発展をもたらしたことに、異論はないであろう。これに加えて、7次から11次の間の海氷条件が、観測隊の夏期行動に味方した事も事業の発展を支えてくれたと、私は考えている。7次「ふじ」が昭和基地へ接岸したのは、夏作業が始まろうとする1月27日夜であったし、11次では帰途氷海にビセットされるという事態に遇った。しかし、「ふじ」は5年続けて、基地に接岸できたのである。7次の7棟に引き続き、8次では6棟の建物を建てた。この中には高床式の観測棟と放球棟があった。鉄骨を組んだ檣の上に木造パネルの建屋を建てたもので、かがめば建屋の下を通り抜けることができた。風が吹き抜けるので、風下側に雪の吹き溜まりができないようにと考えられた構造で、この目的は達成された。観測棟は面積138㎡で、4つの個室と超高層物理の幾つかの分野の観測を行なうスペースを持ち、観測の充実に大きく貢献した。



連載 支部便り①⑥（茨城支部）

講演会と雪上車修復作業の報告

茨城支部から、2つの活動報告が寄せられました。ご協力ありがとうございます。

第23回ミーツ・ザ・サイエンス「南極の今！つくばに戻った隊員たち語る」の実施報告

平岡喜文（45次夏、国土地理院）

南極OB会茨城支部では、公益財団法人つくば科学万博記念財団つくばエキスポセ

ンター*と共同で、筑波地区周辺に住む南極から最近帰国した隊員による講演会を、平成25年6月30日にエキスポセンターにて開催しました。同様の講演会の企画は平成22年から毎年行っており、今回で4目となります。

当日は会場となった同センターの想像

の森「ワンダーラボ」に、小学生から一般までの約 60 名の聴講者が集まりました。講演は、清水悟氏（53 次冬、気象庁高層気象台）から「昭和基地での越冬生活」を、吉高神充氏（54 次夏、国土地理院）から「南極の夏」を、有田真氏（52 次冬、気象庁地磁気観測所）から「地磁気とオーロラ」を、スクリーンに映した写真や動画などを活用しながら説明しました。



防寒服等で登場した講演者たち



三択クイズで正解に手を上げる聴講者たち

講演会の冒頭、南極で着ていた防寒服等の服装で登場し、会場をわかせました。また、講演の途中でクイズを出し、講演会全体を通して正解数の多かった方に、OB 会員から寄贈された南極グッズをプレゼントする企画を行ったところ、たいへん盛り上がりしました。また、講演会の後半では、水を入れた透明なコップに南極の氷を浮かべて聴講者に配布し、中の空気がはじける音や太古の空気を観察していただきました。さらに、講演会の最後には、今年の秋に南極に向けて出発する 55 次隊員の植田勲氏（国土地理院）、松下隼士氏（元国立環境研究所）、塚本賢司氏（つくば市役所）、古賀

聖治氏（産業技術総合研究所）を招き、出発に当たっての決意表明をいただきました。講演終了後は、のちに紹介する雪上車のコーナーに移動して、来場者に説明を行いました。

本講演は、初めて開催した平成 22 年から比べると、企画する側が慣れてきたこともあって内容が年々充実してきており、多数の方々に聴講していただいています。今後につくばエキスポセンターと共同で毎年実施していきたいと思います。また、将来、講演会を聴講された子どもたちの中から隊員となる者が現れることを期待します。

南極雪上車（SM254）の展示と修復作業 石塚徹（34 次冬、産業技術総合研究所）

2011 年 4 月、南極 O B 会茨城支部に、雪上車がつくばに来るとのビックニュースが飛び込みました。茨城支部では、かねてよりつくばエキスポセンターとの共催による講演会等を毎年開催しており、雪上車の常設展示を共に望んでいたところでしたので、このニュースに沸き立ちました。4 月 12 日、エキスポセンターに到着した雪上車は SM254 でした。この車は 30 次隊で南極に赴任し、改修のため一時帰国し、34 次隊で再び昭和基地に赴き、その後約 20 年間で 10,000km 以上を走破し、主に生物や地学調査に活躍しました。



昭和基地の SM254（51 次隊 桑原氏提供）

つくばで再会した SM254 には歴戦の傷跡が多く見られましたが、展示公開するために茨城支部に修復計画チーム（SM プロジェクト）を編成し、手空き総員による週末ボランティア修復作業がスタートしました。

これまで 2 年間の作業では、茨城支部メ

ンバー約 20 名とエキスポセンターの方々がアイデアと力を合わせ、展示説明パネル作成、車両主要部の修復などを行い、今年 6 月にはボディの全塗装が完了し、一段と凛々しくなった SM254 に生まれ変わりました。今後は観測機材の展示や足回りの補修などを進め、科学の街つくばで南極観測を通じた子供達の教材となるよう、支部活動の柱として取り組んでいきたいと思います。



修復作業 2012 年 8 月



8 月修復作業参加者

※つくばエキスポセンターは、1985 年に開催された筑波科学万博で政府館として使用され、万博終了後は最新の科学技術や身近な科学などに親しんでもらうことを目的に、科学館として一般に公開されている。



連載「時は巡り」⑪

12 次隊フラガール

中尾正義（12 次、24 次越冬）

東日本大震災から 2 年半が経過しました。未だに多くの方々が仮設住宅での仮住まいを余儀なくされています。福島県いわき市の「スパリゾートハワイアンズ」も施設の一部が震災で損壊しました。しかし翌年には全館で営業を再開。フラガールのみなさんは全国をめぐり、「フラガール全国きずなキャラバン」や小学生を対象とする「出前授業」を行うなど、復興へむけて笑顔と元気を届けてこられました。

本稿を執筆している 2013 年 8 月の新聞記事に、「スパリゾートハワイアンズで新人フラガール 7 人がデビュー」とあります。彼女たちは「今年 4 月、フラガールを養成する常磐音楽舞踊学院に 49 期生として入学。4 か月間フラダンスなどの猛練習を重ね、少しでも復興の力になるようにたくさんの

人に笑顔を届けたい」とのことです。



「ふじ」甲板ステージで踊る 12 次隊フラガール

今から 43 年前、1970 年にも 7 人の新人が常磐音楽舞踊学院を訪れ、フラダンスの猛特訓を受けました。わたしを含む「彼女

たち」が12次隊フラガールです。

学院でまずお目にかかったのは、責任者だというしゃきとした女性でした。背筋をぴんと伸ばして正座しておられたのを覚えています。当時わたしは大学院の学生で、宝塚のトップスターであった真帆しぶきさんのファンでもありました。真帆しぶきさんみたいな人だと思ったものです。彼女が、当時の常磐ハワイアンセンターおよび現在のスパリゾートハワイアンズで、フラガールを育ててこられた同学院の最高顧問・早川和子さんだったと後になって知りました。2006年に公開された映画「フラガール」の主演として松雪泰子さんが演じた平山まどかのモデルとなった方です。

彼女に、われわれはまもなく南極に出発する観測隊員であり、ハワイアンダンスを超特急で教えていただきたいというお願いをしました。知人を介してあらかじめ依頼してあったこともあり、快く引き受けてくださいました。

彼女は、「ハワイアンダンスの腕の動き、指の動きなどにはすべて意味があり、手話のような表現力を持っている」という基本のお話をしてくださいました。また、ここではハワイアンだけではなくタヒチアンダンスも行っており、「タヒチアンの方がテンポも速く勇壮なので、皆さん（観測隊員）がやるにはそちらも混ぜた方がよいでしょう」というアドバイスもくださいました。「実際のダンスの指導は若い人の方が良いでしょう！」ということで、若いフラガールのお一人を指導役としてつけてくださいました。指導役として現れたのが豊田恵美子さん（旧姓）でした。映画「フラガール」で蒼井優さんが演じた谷川紀美子のモデルとなった方です。

12次隊フラガールにとって、それからの一日半は地獄でした。なにせ踊りといえば盆踊りくらいしか経験のない「彼女たち」でしたから。唯一の救いは、指導して下さる恵美子先生に見とれることができた事くらいだったでしょう。とにかく、比較的覚えやすい曲目として恵美子先生が選定し

てくださった「月の夜は」「ワンパドゥ・トゥーパドゥ」「ビニビニ」などの曲をなんとか踊れるようになったのです。

12次隊フラガールのデビューは特訓2日目の夜のことでした。お客がぎっしりと入った常磐ハワイアンセンターのメインステージです。練習の成果を実際に試した方がよいという恵美子先生の特別のはからいでした。とはいえ、わずか一日半の即席の練習です。しかも観客は、お金を払って入場してきているお客さん達です。極度に緊張していたことは間違いありません。もっとも、本来のフラガールとして踊ったものではありません。彼女たちに混じって、「お客さんの中で踊りたい人はステージへどうぞ！」という誘いに乗ってステージに上がる素人集団という設定ではありました。

12次隊フラガールが結成されたのには訳がありました。「ふじ」の赤道通過時に開かれる赤道祭でなんとしても優勝を勝ち取れ！という村越副隊長の至上命令を帯びてのことでした。

晴海出航から9日目、その時がきました。常磐ハワイアンセンターからいただいた豪華な衣装を身にまとった「彼女たち」が「ビニビニ」の音楽に合わせて「ふじ」甲板のステージに登場します。割れんばかりの拍手と歓声。船上でも練習を繰り返していましたが、観測隊の出し物は秘中の秘として漏らさないようにしていたからでしょう。踊りはともかく、出し物が審査員や乗組員の思いもよらぬものであったことと、絢爛たる衣装のおかげで、期待に応えることができたのでした。

恵美子先生とはその後再会を果たし、改めてお礼をいうことができました。しかし東日本大震災が起きたのはさらに後のことです。早川和子先生も豊田恵美子先生も、震災後も相変わらずスパリゾートハワイアンズで頑張っておられるとのこと。先生方の弟子である12次隊フラガール一同、夢と笑顔と元気を届けるみなさまの今後ますますのご活躍と一日も早い復興とを心より念じています。

会員からの便り（通信費振込み用紙に記入された皆さまの便りを適宜掲載していきます）
元気にしております。

磯貝重信様 宗谷乗組員：1次、2次、3次、森田 衛様 15、16次ふじ艦長、
及川 茂様 13次冬、小田哲夫様 11次冬、
召田成美様 16次冬、20次冬、26次冬、30次冬、36次越冬隊長



連載「帰国後の各隊の動き」

第 19 次越冬隊の同窓会

平成 25 年 7 月 27 日、山岸久雄第 53 次隊長、石沢賢二第 53 次越冬隊長の帰国報告を兼ねて、第 19 次越冬隊の同窓会を東京は新橋の中華料理店で開いた。両隊長の壮行会の折には 16 名が集まったが、今回は北海道から九州まで全国から、30 名越冬のうち 23 名が集まった。第 19 次隊の一人だった山岸氏からは隊全体の報告が、第 19 次若手三人衆の一人で当時一年間みずほ基地で生活した石沢氏からは、最近の南極観測隊と昭和基地の近況を紙ベースで詳細に報告して頂いた。平澤威男隊長からは、南極観測隊の

活躍と元気に再会できた喜びを祝して頂いた。各隊員からは、叙勲を受けた、少し体調を崩した、孫が生まれたなど、近況報告があった。会場の雰囲気作りは山岸氏が準備して、五十嵐、斎藤氏からは、NHK の生放送があったこともあり、それらの記録デジタル化の報告があり、金戸氏からはガリ版刷りの日刊紙“日刊 19 次”の pdf 化の報告と紙ベースで一部復刊配布頂いた。次の集まりは地方で行おうなどの意見も出て、再会を誓って散会した。(五十嵐、安田)



第 19 次隊参加者の皆さん

38 次観測隊帰国 15 周年記念の会

38 次隊は、平成 25 年 8 月 24、25 日に北海道小樽の「青塚食堂」（食堂兼民宿）で、（越冬隊）帰国 15 周年記念会を開催しました。

私たちは、帰国後 5 周年ごとに全体での同窓会を開催し、平成 15 年 8 月の 5 周年（於：山梨県勝沼「ぶどうの丘」、アルバム完成記念）、平成 20 年 8 月の 10 周年（於：長野県富士見「板橋区青少年センター」、IPY メダル贈呈式）、に続いて 3 回目となりました。また 5 周年イベントとは別に、毎年 9 月に東京都多摩地区あきる野での懇親バー

ベキューも、帰国後一度も欠かすことなく恒例行事としています。

今回は、北海道在住の隊員各位（金戸ドーム副隊長、西村・塩崎・松島・岩本・成田・小関の各隊員）により、宿や配車など設営全般の幹事をして頂きました。この場を借りてお礼申し上げます。参加者は前回までよりも少なく計 14 名でしたが、盛況に催すことができました。「青塚食堂」は小樽の祝津エリアにあり、地元の鮮魚を刺身や炭火焼などで豪快に味わえる海辺の人気食堂です。「おたる水族館」が隣にあります。

道産子の海の幸を酒の肴にして、お互いの近況を語り合うと共に、初日夜～2 日目午前にかけて、最近の観測隊の動向がスライドやビデオで詳しく紹介されました（52 次山内隊長、53 次東隊員、54 次金尾隊員）。また 38 次ドーム越冬中の写真などが、金戸副隊長により上映されました。また西村隊員執筆の「南極料理人」は、映画化され人

気を博しましたが、ついに集英社「少年ジャンプ」の連載にも決まったそうです。

2 日目の昼は、小樽公園「見晴らし亭」でジンギスカンを楽しみ、帰国 15 周年記念会はあっという間に終わりました。次回は 20 周年、どの地方（関東も含む）で開催されるか、今から楽しみです。（金尾政紀）



第 38 次隊参加者の皆さん



訃報 ご遺族や会員の方からお知らせ頂きました。謹んでお悔やみ申し上げます。			
兼子一郎様	2 次夏、機械	2013 年 3 月 12 日逝去	享年 83 歳
半田昌良様	ふじ 12 次、航海科	2013 年 3 月 20 日逝去	享年 80 歳
長井栄作様	宗谷 4、5、6 次	2013 年 6 月 7 日逝去	享年 91 歳
金光将介様	19 次越冬、超高層	2013 年 8 月 13 日逝去	享年 69 歳
西山泰男様	宗谷、1、2、3、4、5 次	2013 年 8 月 14 日逝去	享年 78 歳

第 14 回『南極の歴史』講話会の開催について

詳細は、同封リーフレットの通りです。会員・会友の皆様の多数参加をお願いします。

1. 日 時：2013 年 9 月 28 日（土） 受付 13：30 より
2. 場 所：日本大学理工学部 1 号館 132 教室 （千代田区神田駿河台 1-8-14）
3. 講話会内容
 - I 『南極観測技術シリーズⅡ．ーイプシロンロケット発射に因んでー』

「ペンシルロケットから南極オーロラロケット」	講師	島野邦雄氏（14 次越冬）
「南極ロケットの打ち上げ計画」	講師	芦田成生氏（11 次越冬）
「ロケット観測とは」	講師	梶川征毅氏（14 次越冬）

II 『南極研究先端シリーズ』

「南極のオゾンとエアロゾルの話」

講師 伊藤朋之氏 (19 次越冬)

4. 申込方法： はがき、電話、Fax またはメールで南極OB会事務局へお申し込みください。

2014 年南極OB会名入りカレンダーの販売と注文受付

今年も南極OB会名入りカレンダーを販売します。昨年は大好評で早々に完売となりました。購入希望の方は同封の用紙等を利用し、お早めにお申込み下さい。

南極OB会アーカイブ事業報告

南極OB会は元観測隊員が保管していた隊運営資料、生活一般資料、観測・設営機材、装備・衣料品、記録ノート、スライド、写真、グッズ等を常時、受け入れています。以下の貴重なアーカイブズ資料が届いていますのでご報告いたします。資料の受け入れについては南極OB会事務局にお気軽にご相談ください。

アーカイブ受入資料 村山雅美資料

南極地域観測隊員心得集 (1 次隊、1956 年)、アルバム・南極観測隊宗谷時代 (1~3 次隊)、同 (5 次隊)、同ふじ時代 (15 次隊)、犬の持ち帰り関連資料 (検疫・予防注射、1966 年)、砕氷船調査資料 (1967 年)、9 次隊関連新聞切り抜き・書簡・電報 (1965~69 年)、録音テープ (時の人、明日出発する第 9 次南極観測隊長、共同通信社、1967 年)、録音テープ (時の人、極地研究センター初代所長、共同通信社、1970 年)、世紀の北極点踏破 (日大遠征全記録、週刊読売、1978 年)、南極地域観測視察報告 (27 次隊、1986 年)、ネガ・ベタ (27 次隊)、南極観測の将来を考える会、南極OB会発足資料 (南極 50 周年記念事業関連書類)、資料・アルバム・中曽根写真集、スライド・中曽根・長谷川代議士南極視察、35mm ベタ焼・南極飛行、35mm ネガ・航空路開拓、アルバム・海部・中村視察等。

* * * 広報委員会からのお知らせ * * *

○ 連絡先の変更があった場合の変更連絡のお願い。

南極OB会の運営は毎年集めさせていただいております通信費に支えられています。経費節減の観点から会報の発送は「ゆうメール」を活用していますが、低料金の分、通常の郵便のように住所変更先に転送するサービスは受けられません。配達不能な場合は南極OB会へ返送され、事務局では発送先確認を行って判明した場合は再度新住所に発送しています。

住所、電話番号、メールアドレスが変更になった場合には、お手数でも南極OB会事務局まで電話、Fax、メールでご連絡をお願いします。また、新たにメールアドレスを取得された方もお手数でもお知らせください。

【編集の終りに】

この号は今バングラデシュの首都ダッカにあるホテルで編集しています。原稿を投稿していただく方とメールでやり取りをしながらの作業も楽しいものです。 (松)

南極OB会事務局 〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-3-2 牧ビル 301

電話 : 03-5210-2252 FAX : 03-5275-1635

メール : nankyoku-ob@mbp.nifty.com

郵便振込 : 加入者名 南極OB会 00110-1-428672

南極OB会ホームページ : <http://www.jare.org/>
